にょど川

仁淀川町広報

2011
3月号

雪化粧の秋葉まつり

氷の芸術に感動　赤滝・白滝

武田氏発祥の韮崎市から視察団

集落見聞録〈実間〉

雪化粧の「秋葉まつり」

２月 11 日、別枝で土佐の三大祭りの一つ「秋葉神社大祭」が開催され、雪景色の山里に約１万人の参拝客らが訪れました。

岩屋神社に、祭りの総指揮役「鼻高」が到着すると、辺りにどよめきが起こり、空気がピンと張り詰めました。観客たちが待ち構えるなか、最初の奉納組・沢渡組が到着して祭りの花形「鳥毛」と子どもたちの「練り」が披露され、次いで本村組、霧之窪組が次々に練り込みました。

３組の太刀踊りが終わると行列が整えられ、いよいよ練り行列が岩屋神社を出発します。鼻高を先頭に、みこしを中心とした神幸行列、これに踊りの奉納組（今年は霧之窪、本村、沢渡の順）が続き、総勢約 200 人の長い行列が、秋葉神社へと練り歩きます。

出発した行列は、市川家で一夜を過ごされたご神体を迎えに行き、鳥毛と練り、太刀踊り、神楽が奉納されました。笛や太鼓のおはやしを山々に響かせ、法泉寺、旧庄屋中越家などゆかりの地では鳥毛や太刀踊りなどを奉納しながら、約３km の山道をゆっくりと練り進みました。

鼻高がしめ縄を払い落として行列が境内に入り、輿守たちが「キョウサー、キョウサー」と勇ましい掛け声とともにみこしを激しく揺さぶり巡ると、場内は大歓声に包まれました。数度の綱引きの末みこしがようやく拝殿中央に納まると、鳴り物が進み出て、最後の鳥毛と太刀踊り、神楽が奉納され、観客からは惜しみない拍手が送られました。

三日間にわたるご神幸

今年も二月九日から十一日までの三日間、秋葉神社のご神体が年に一度の旅に出ました。

九日、みこしに乗ったご神体は、地元で働く有志らの手で岩屋神社へと運ばれました。一行は祭り当日の順路を秋葉神社から逆にたどって岩屋神社へ到着、ご神体は最初に奉祀されたこの神社で一泊されました。この日は、祭りのためにアメリカから再来日した元ＡＬＴ（外国語指導助手）の

ザック・スターンさん（25歳）と、知人でワシントンポスト紙の東京支局記者チコ・ハーランさん（28歳・アメリカ）も、神輿おろしを手伝いました。

二日目の深夜、ご神体は神官に抱かれてかつての国境関所の番所役「市川家」へと運ばれ、もう一夜を過ごされました。

そして三日目、オナバレ（ご神幸）が長い行列を作ってゆかりの地を巡り、鳥毛や太刀踊りなどを奉納しながら秋葉神社へのご還幸。いよいよ「練り」の一日が始まります。

早春の山里彩る時代絵巻

今年もひょうきんなしぐさで祭りを盛り上げた「油売り」

祭りの朝、腰に太刀を差し準備する踊り子。表情に緊張が走ります

神幸行列の一員「太鼓かき」。油売りと一緒に神楽も舞います

祭りの総指揮役「鼻高」

練り

おみこし

鳥毛ひねり

太刀踊り

みんなで支える伝統文化・「秋葉さん」の舞台裏

秋葉まつりに再び参加するため帰ってきた元ＡＬＴのザック・スターンさん（右）。健在の土佐弁で神官さんとごあいさつ

今年で11年目、最後の鳥毛役を務めた霧之窪組の藤原力雄さん（右）。終了後思わず涙し、仲間にからかわれて照れ笑いを浮かべていました

特産品販売所も大盛況！

沿道のあちらこちらに町の特産品販売所がありました。イリモチや手打ちそば、猪汁、お茶など仁淀川町の味が並び、どの店も盛況で、行列ができていました。

今年初めて太刀踊りに挑戦した大原蒼史君。祭りへの参加は自分で決めました

子どもたちに「ボス」と呼ばれ慕われる本村組の西村仁郎さん。平成21年7月から世話役長を務めています

本番直前に別府小学校で行う「合同ならし」。祭りに来られない地域住民のためにと３年前から始まりました

祭り本番前の日曜日、鳴り物や鳥毛、踊り棒などの飾り付け「切り飾り（はりもの）」の作業を組の人総出で行います